

アリストテレスの Sensus Communis について

山内 得立

アリストテレスの Sensus Communis が何を意味し、我々がそのもとに何を理解すべきであるかを明かにする前に、我々が之れに關心し、そして之を問題としなければならなかつた理由を述べて置かう。直観とは一般にそれが如何なる仕方によつて、または如何なる媒介によつてであるにせよ、對象が我々に直接に與へらるゝ限りに於て生ずるところの認識の仕方である。直観の最も我々に近きものは經驗的直観である。經驗的直観とは即ち感覺であるに外ならない。感覺は我々に與ふるに對象の經驗的な現象を以てするが故に、對象は感覺を通してその最も平盤なる形態を我々に呈露するのを常とするのである。我々は眼によつて事物の色を見、耳を通じて音を聞くであらう。眼によつて人の見るものは事物の色であつて音ではない。耳を通して我々の感覺するものは事物の音であつてその色ではあり得ない。事物の感覺に於て一つの現象は常に一定の感官に對應し、一つの感官は或る一定の對象を把握することに定められてゐる。それは極めて明瞭なる事實であらう。併しまた一方に於て我々は事物の色を見ると共にその形を見、一の語をきくと共に或ものゝ意

味を理解するのである。我々は單に色を色として見るのではなく色を何物かの色として見、音を音として聞くのではなく、音を或ものゝ音として聞く。赤を赤としてのみでなく、赤を青とは異なるものとして見、音を音としてのみでなく音を色から區別して聞く。人は眼によつて一つの色を見るがこの色の他と異なる所以のものを同じ意味に於て見るとはいへない。人は耳によつて一つの音を聞くことができるが同じやうにその意味を聞くとはいひ得ぬであらう。しかもそれにも係らず、語られたる言語に於て人は直接にその意味を理解し與へられたる色に於て直ちに何物かの形を見るのである。即ち一方に於て我々の有するものはたゞ個々感覺であり、個々感覺には固有なる對象が定められてゐる。にも拘らず我々は他方に於て同時にそれとは異なる、それ等以上の或ものを感覺することも事實である。この或ものゝ感覺は如何にして可能であらうか。

この問題に對する最初の、そして最も容易なる解答は理性を感覺から區別してこの或ものゝ把住に當てようとする企てである。感覺はその定めなき主觀性の故に、またその變じ易き現象性からして嚴密なる學問の領域からは追放せられんとしたことが少くなかつた。感覺的なものが我々に與ふるに、學的認識に於て缺くべからざる普遍性と必然性とを以てしないが故に、學的なるものゝ領域に入るべき第一歩は感覺から感覺的ならざるものを嚴密に區別するところにあるとさへ考へられたことは不思議でない。人間の思想の歴史に於て理性を感覺から區別した最初の人はクロトンのアルクマエオンであつたと傳へられてゐる。(註一)

(註一) Diels: Die Fragmente der Vorsokratiker. Bd. I, S. 135

感覺が一般に受納的であり、對象によつて觸發せらるゝ限りに於て存在し得るのに對し、我々の知識が如何なる意味に於ても單に受動的であり得ない點からして知識のこの綜合的な力を感覺以外の、又はその以

上の或ものに求めんとして、我々の認識能力を二つの要素に區分することはカント以前の哲學に於ても普通であつた。プラトンはテアイテトスの或節に於て(註一)感覺が知識または學識に非ることを論じて次の如く云つてゐる。「人は眼によつて白と黒とを見、耳を通して高音と低音とをきゝわけ……さうしてこの一つの感官によつて知覺せられるものは他の感覺によつて知覺せられ得ない、例へば聽覺の對象は視覺によつて知覺せられず、視覺的對象は聽くことによつて知られないやうに、といふことを汝は認めるであらうか。」併しながら人は白と黒とを見ると同時に白と黒との相同じからざることを見る。高き音と低き音とを聞くと共にこれ等の音の相異なることを明晰に意識するであらう。我々は白を見、黒を見ることはできるが同じ意味に於てこの二つの色の互に相異なる所以のものを見ることはできない。我々は高音と低音とを聞き得るが、この二つの音の相違するところのものを同様に感覺的に聞くことは不可能である。其れにも拘らず、併し我々は白と黒とを見ると共に此等の互に同じからざることについての明白なる意識を有つてゐる。この二の色の、又は二の音の相違性についての意識はそも／＼如何なる種類の意識の仕方であらうか。プラトンはそこで言葉を改めて次の如く注意深く論じてゐる。我々が眼を以て又は耳を以て、見又は聞くといふのは正確である。正しくは眼を以てではなく、眼を通じて、耳によつてではなく耳をとほして見または聞くのである。感官はたゞ我々の意識の、統一的なる心性の、夫々に於て働くところの門戸であるにすぎない。そこには恰もトロイの木馬に於てのやうに互に無關係なる多くの感覺があるとは何人も考へぬであらう。感官はたゞそれ等の多くが一つに結合せられたる或ものの——即ち心性の、夫等を通じて知覺するところの道具であるに外ならぬのである。其點からして我々の意識には肉體に屬する個々の感覺と、之とは獨立に、むしろ此等を通

じて働くところの心そのものを區別しなければならぬ。そこでプラトンは結論していふ。知識は決して受動的なる印象にある (*παθημα*) のではなく、それについての推理 (*συναγωγος*) にあるのである。

(註一) *Platon Theaetetus* 186

プラトンはかくして、個々感覺によつては知覺せられ得ないものを、従つてそれに對しては之を知覺すべき特定の感覺の見出され得ないものを、一言にしていへば所謂共通的なもの (*κοινον*) を例へば存在と非存在、類似と差違、一と多、美と醜等の對象に求めてゐる。此等の對象は即ち個々感覺によつてはななく之等とは異つた理性によつて把握せられ、或は把握し得ると信ずることがプラトンの此問題に對する解答であつた。

併しながら我々は白を見、黒を見ると共にこの二の色の異なることを同時に見るのである。白と黒とを見てその後、或はそれと共にその異同を考へるのではない。人は一つの言葉を聞くことに於てその音をきくよりも寧ろその言葉の意味を直接に聞くといふべきである。勿論我々は言葉の音をきくと同一の仕方にてその意味をきくことができぬであらう。しかしそれにも係らず、一つの言葉に於て我々の直接にきくものはその意味であつて却つてその響ではない。ベルグソンが言つたやうに薔薇に於て戀人を追憶するのは薔薇によつて戀人を聯想するのではない、むしろ薔薇に於て直ちに戀人を見るのである。二つの事物の異なることは二の事物に於いて考へられた思惟ではなく、むしろ一つの直観である。勿論二の事物はそれについてその異同を比較し考慮されることも可能であり、またさういふ場合もあり得るのであらう、併しそれは我々がこゝに意味することゝはまるで異つた場合である。直接なる事物についての感覺に於て人はこの感覺の對象に非

る或ものをしかもこの感覺と同時に知覺することのあり得る事實を我々は今問題としてゐるのであるが、此場合そこに我々の見又は聞くものは決して思惟によつても推論によつてもあり得ない。共通的な對象を感覺的對象と峻別し、従つて理性を感性から引離して夫々を夫々に對當することはむしろ容易であるであらう。さうしてプラトンのとつた途は恰もそれであつた。併しアリストテレスにとつては二つの色の異なる所以のものを知るものは思惟でなく、感覺でなければならなかつた。そこには二の色の異なる所以を考へることではなく、此等の互に相異するところのものを見ることが問題とせられたのである。此場合これ等の互に異なる所以のものはこれ等の二の色を離れては存在しない。しかしそれと同時にこれ等の互に異なる所以のものは此等の二の色と同一のものではあり得ない。かくの如き關係に於て共通の對象と個々對象との關係を研究しようとするのがアリストテレスの問題であり、また我々のそれでもあつた。従つてそれはプラトンの意味に於ての、又はカント的な立場に於ての、理性的なるものと感性的なるものとの關係を意味してゐない。一言にしていへば我々は理性を感性から區別することによつてこの問題を解答し得ようとは企てない。それは問題の解答でなく、否問題そのものの正當なる理解でさへあり得ないからである。問題はそれ故に再び問ひ改めらるべきである。さうして事實は常に次の如くであるであらう。我々は白を見、黒を見ると共に、此等の色の互に同じからざる所以のものを見る。しかし我々は白を見、黒を見ると同じ仕方に於て、これ等の互に異なる所以のものを見ることができない。即ち我々はかくの如き特殊なる對象について之を把握すべき特定の器官をもつてゐない。しかもこの對象は個々感官の對象とは明かに區別せられたる存在性に於てそこに存在することも事實である。我々は如何にしてかくの如き對象をこの意味に於て把住し得るであらうか。

アリストテレスの *Sensus Communis* の説はこの問題に答へんとする一つの試みであつた。我々は先づ彼れがこの説のもとに何を意味してゐたかを穿鑿することからして初めよう。アリストテレスは「共通感覚」の下に次の如き種々なる精神の働きを含めてゐたやうである。各々異つた個々感覚の所與を比較し辨別する作用がその一である。個々感覚によつて我々が知覺したものを更に知覺するところの働きがその第二である。

次にアリストテレスによつて附帶的感覚、又は間接的感覚と名づけられたものがその三である。其他に運動、形態、容積、數量、時間等を知覺するところの作用、想像の機能、記憶及び追憶の作用、睡眠、夢の現象等がこの中に數へられてゐる。併し運動、形態等を知覺する作用は共通感覚の働きであつても運動、形態そのものはむしろその對象であるべきであらう。想像、追憶等の作用は共通感覚の一種ではあつてもその本質を明かにするものであるとはいへない。共通感覚の特質を明かにするために我々は其故に先づ最初の三者の意義を研究しなければならぬであらう。

第一に共通感覚とは個々の夫々異つた感覚、例へば視覚、聽覺、觸覺等によつて與へられたものを比較し辨別する働きであると解せられる。一の形態の知覺に於て我々はその色を見ると共に擴がりをも知覺するであらう。形態に於て色と擴がりとは必然的な直觀に於て結びついてゐる。我々は何等の擴がりをも有たぬ色を見得ないと同じやうに、如何なる色をも有たぬ擴がりを知覺することはできない。しかしそれにも係らずそれと同時に色は擴がりとは同一でないことを知つてゐる。一つの形態に於てこの色と擴がりとを區別す

るものは何であらうか。擴りは觸覺によつても感知し得らるゝが又視覺によつても知り得らるゝのである。否擴りは多くの人々によつて說かれてゐたやうに視覺と觸覺との協働によつて感知せられ得るのであらう。空間表象が如何にして生ずるかは一つの問題であるが少くとも視覺がその成立に於て多くの役割を占めることは明かであるであらう。一の形態に於て我々が色を見、さうして擴がりを見るのは等しく視覺の働きである。一つの形態に於て色を見るのは視覺であり、擴がりを見るものは視覺であるが、色と擴がりとの互に相異なることを知るものは如何なる感覺であらうか。我々は勿論かくの如き或ものを、此の意味に於て感知すべき何等の特殊なる器官を有つてゐない。それにも拘らず我々は色を見、擴がりを見ると共にこれ等の互に異つてゐることをも知つてゐる。このことは如何にして可能であるであらうか。

我々は卑近なる場合から出發しよう。我々が白を見、黒を見て、或は色を見、味を味ふことによつて此等の互に同じからざることを知るためには少くとも、二つの點に於て——即ち之等の同じからざることを知るものの、一にして同一なることに於て、第二にこれを知る時の一にして一定したることに於て、必要な條件を見出すべきである。詳しくいへば白と黒とを異るものとして辨別するものは同一の意識者でなければならぬ。のみならず同一の意識者が一定の時に於て同時に白を見、黒を見ることによつてのみ此等の互に相異なることも意識せられ得るのである。故にこの二の色の異同を辨別するためには同一の意識者が同時に之等を知覺することを必要條件とするといはねばならない。併し問題はむしろそこから初まるのである。一にして同一なる意識者が同時に互に異るところの二のものに如何にして關係し得るのであるか。一にして同一なる意識が同時に異なる感官に於て、又は異なる感官を通じて如何にして働くことができるのであるか。

アリストテレスは之に答へて、それは場所と數の上からは一つであり分たれざるものであるが、在の上からは分たれたるものである(τὸ εἶναι ἢν διαπέτορ, τὸ ὂν δὲ καὶ αἰδητὸν ἀδιαπέτορ) (De anima 427a) と云ふ。ヒックスは、この τὸ εἶναι を論理的に (logically) と譯してゐるが、(註一) この場合論理的とは何を意味するのであるか。それが單なる普通の意味の論理的でないことは εἶναι といふ語それ自らが表明してゐる。此場合この意識は場所からしても數から云つても不分にして同一でなければならぬが、その存在の上からは分たれてゐるといふ。存在とは意識そのものゝ存在であるべきである。意識の存在は意識の本體を意味しはしない。本體からいへばむしろ意識そのものはどこまでも一にして分たれざるものとしてあるべきであるからである。それは存在そのものであるよりもむしろ存在の仕方であり、殊に Being (註二) の主張するやうにその關係の仕方、詳しくは知覺せられたる事物に對する關係の仕方を意味すべきであるであらう。即ち意識はこのとき一として同一であるが、與へられたる外界の對象によつて或ときは或ものに、他の時は他のものに關係することができ。しかし意識はかくの如く種々なるものに關係をもちながら、それ自らに於て一つの分たれざる働きであるが故に我々は白を見、黒を見ると共に白と黒との異なる所以のものを見得るのである。さうして意識が——一にして同一なる知覺者がその關係に於てかくの如き分有性を有するが故にそれは一にして同一でありながら多くの異なる事物に關係し得るのであると考へられる。知覺者は場所と數に於て同一であるがその存在の仕方、に於て異つてゐる。このことはアリストテレスが何故に同一なる知覺者が異なる對象に關係し、これ等を比較し辨別し得るかといふ問題に答へんとする一つの試みであつた。併しアリストテレスのこの解釋はこの問題に對する決定的なる答へであり得たであらうか。

何よりもそこに我々の注意すべきは一の同一なる知覺者が或ものを知覺し同時にそれと異なるものに關係し得るのは現實なるものとしてではなく、可能的なるものとしてであるといふことであらう。知覺者はそれが現實なる知覺作用をいとなむ限り、一のことを知覺し同時に他のものを知覺することはできない。例へば同一の表面が白くあつて同時に黒くあることは不可能であると同様に現實なる知覺は白を知覺しながら同時に黒を知覺することができない。若し知覺する働きが知覺せられる對象と別のものであるならばこのことは或は可能であるかもしれない。併しアリストテレスが明言してゐるやうに現實なる知覺に於ては知覺する作用は知覺せらる對象と一つである。現實の音は現實の聽く働きと同一である(註三)。赤き花を見るとき現實の視覺はそれ自ら赤き色によつて彩られてゐる。アリストテレスにとつては甘きを味ふ作用は其れ自ら甘く甘き味ひを外にして甘く味ふ作用はなかつた。若しさうであるとすれば赤き色を見る作用は自ら赤く、黒き色を見る働きはそれ自ら黒くあるといはねばならない。是は一つの表面が赤く塗られ、綠に彩られることゝ同一であるであらう。さうして一の同一なる表面が赤く塗られ同時に綠に彩られることが不可能であるやうに知覺作用は赤き色を知覺し、同時に綠の色を感知することはできないのである。勿論可能的狀態として知覺者は或時は赤を、他の時は綠の色を知覺することは容易であるであらう。併しそれは可能態としての知覺者であつて現實なる知覺者ではあり得ない。現實に於て赤を知覺しさうして同時に綠を知覺することは、現實的たる知覺作用そのものの性質からして不可能であるといはねばならない。しかも赤と綠とを同時に現實に於て知覺することなしにはこの二の異なる所以のものをも分別することができない筈である。白と黒との異なる所以のものゝ知覺は白と黒とが同時に現實的に知覺らるゝ限りに於てのみ可能であるとすれば、こ

の二つが同時に知覺せらるゝことの不可能である以上、この二つを比較し辨別することも至難であるといはねばならない。我々は上に一にして同一なる知覺者が其の存在の仕方からいつて二つの對象に關係し得ることを證明せんとしたがそれはたゞそれが斯くの如く關係し得ることの可能性であつても關係することの現實性を明かにしたものではなかつた。従つてその可能性がそこに明かにせられてもそれ故にこの問題は斷定的に解決せられたといふことはできない。知覺者が二の事物に關係し得る可能性を有つてゐても現實的に同時に關係し得ない以上は之によつて此等のものゝ互に異なる所以を知覺し得ないからである。

(註一) Hicks: *Aristoteles, De Anima* S. 119.

(註二) Peare, *Greek theories of elementary cognition*, S. 279.

(註三) *Aristoteles: De Anima* 426 a

アリストテレスは *Physics* 220a に於て次のやうにこの點に關して論じてゐる。そこに彼は時間上の今と空間的な點とを比較して此等は各々二の相をもつてゐることを明かにしようとした。時間とは前後における運動であり、空間上の點 (*χρονικόν*) はこの時間的な點即今 (*τὸ νῦν*) に相當する。さうして今も點も其れが前に先だつものの終りであり、後に來らんとするものの始めてあることに於て共通である。即ちそれ等は共に一の極限であり、凡て極限的なものゝ性質からして二つの側面を有することに於ても同様である。一の點が直線に於て初めであると共に終りでもあるやうに今は過去の *terminus* であると共に未來的なものの *initium* でもあり得るのである。點又は今はこの意味に於て一つものゝ中に二の關係の仕方を又は存在の仕方をもつてゐるといふことができよう。それと同じやうに知覺者はその同一性を保持しながら同

時に多くの、時としては全く相反したる事物に例へば白と黒との色に關係することができるのである。さうしてそれが二である限りに於てそれは彼等に種々なる仕方にて關係し、それが一つである限りそれは彼等をも一つの互に比較せられ得べき結合に於ても來すのである。(註一)

(註一) 此等の點については Brentano: Psychologie des Aristoteles S. 91-92 及び Kampe: Die Erkenntnistheorie des Aristoteles S. 108-109 參照

しかし一つの點が過去から見てその終りであり、將に來るべきものの始めであるといふのは一つの點そのものの性質ではなく、之を云ふものゝ見方の差にすぎない。従つてそれを規定するものは觀點の差別であつてその區別は一つの點又は今そのものゝ中にあるのではない。それと同じやうに一つの知覺者が或時は白に、他の時は黒に關係するのは知覺者そのものにかくの如く關係し得る可能性があるのではなく、たゞ或時は或方面から、他の時は他の方面からそれが見らるゝことによつてかく區別せらるゝのである。しかしそれでは知覺者そのものに比較し辨別する働きがあるといふのではなく、たゞ一つの知覺者が或る觀點から見ればかく見られ、他の觀點から云へば他のやうに云はれ得るといふにすぎない。何故に一つの知覺者が白を見、さうして黒を見てこの二つの互に異なる所以のものを見るかといふことはこの説明によつても明かにせられ得ぬといはねばならない。

所詮は我々は一の色の知覺に於てこの知覺をこへ、他の色の感覺に於てこの感覺を越えて、此等を互に連結せしむるところの或る働きを豫想せねばならぬであらう。白を見ると共に黒を見、色を見ると共に味を味ふものは白でもなく黒でもなく、色でも味でもないところの、さうしてそれ故に白でもあり黒でもあり、色

でも味でもあり得るところの或ものを豫想しなければならない。しかし我々はかくの如き或ものを色の外に又は味とは別に假想することは許されない。それを敢へてするとき例へば能力心理學の如き考へに陥らざるを得ないのである。アリストテレスを能力心理學の創始者と見ることによつてこの問題を避けることは容易であるであらう。しかし事實は我々は色を見る眼の外に、音を聞く耳の外に、色と音との異なる所以のものを見又は聞くべき器官を有つてゐない。赤と青との區別は尙眼によつて見られ得るであらう。冷まさと苦まさとを辨別することは味覺によつて十分であるであらう。しかし色と味との同じからざることを見るものは何であるであらうか。人はこれを感覺とは離れたる理性によつて判斷するとはいへない。なぜなら我々はこの區別を此等の事物についての推理によつてではなく、これらの事物に於て直接に知るのであり、或はむしろ直接に見るのであるからである。赤は何故に青と異なるのであるか。人はこの問ひに答ふるに何等かの理由を以てすることはできない。我々はたゞ赤と青とに於て之を見るといふより外に答へやうもないであらう。しかし我々はかくの如き對象をこの意味に於て直接に見るべき特殊なる器官をもつてゐない。このことは如何に考へらるべきであるであらうか。

三

こゝに於て我々はアリストテレスの共通感覺についての他の一つの意味に移つて考へてみよう。彼れは感覺について第三に偶然的感覺なるものをあげた。そこに偶然的といはれるのはむしろ附帶的なものを意味する。アリストテレスに於ては偶然的なるもの (*τὸ κατὰ συμβεβηκός*) は一般にそれ自らによるもの

(*to nach auto*)と對立するが茲でも附帶的な感覺はそれ自らに固有なる感覺(*to idrov*)と對立してゐる。それはそれ自らによつて、それに固有なるものをではなく、他の存在に於てそれに附帶して存在するものを意味する。例へばディアレスの息子が白き着物を着てゐるのを見ると、我々の直接に見るものは白き着物であつて、ディアレスの息子はたゞこれ附隨して見られるにすぎない。即ちこの時ディアレスの息子を知るものは附帶的感覚によつてである。

一の物に於て他のそれとは外的なる或一つのものの存在を知覺せしむるのはそのものにとつて偶然であるにすぎない。三角形が三つの角によつて成立することは三角形のそれ自らによる存在であるが、クローバーが四葉であることは偶然による存在の仕方である。凡て或一つのもののそのものをしてその如く有らしむるところのものは、その物にとつて必然的であるが、そのものにとつて單に附帶的にしか存在するにすぎないものは偶然的とよばれる。偶然的感覺とはこの意味に於て附帶的な感覺でなければならぬ。我々は赤を見ると共に附帶的に尙何ものかを見ることがあるであらう。我々は赤を常に何物かとして、例へば赤き花として、赤き火として見る。さうしてこのことは即ち次の如き場合に共通感覺と連結して來るのである。人は赤を見、さうして青を見ると、赤と青との外に、尙此等の事物に附帶的なものとして赤と青との異なる所以のものを見る。この異なる所以のものはそれ自ら赤でもなく、また青でもないが赤と青とに附帶的なものとしてそこに見られるのである。それは赤と青とに於てあるが赤又は青と同一なるものではない。赤と青との差違はそれ自ら赤でもなく青でもないことに於て赤と青との差違として存在するからである。しかしそれは赤及び青をはなれて存在し得はしない、この二重の關係を總括して我々は偶然的または附帶的な關係と名づけ

るのである。

故に偶然的なるものとは悪しき意味に於てたゞかりそめなる存在をではなく、それ自らに於て一つの、少くとも存在の特殊なる意味に於て成立するところの或ものを意味しなければならぬ。それはたしかにそれ自らとして一つの存在であらう。たゞそれはそれ自らに於てではなく、常に他の一つの存在に於て、又はこの存在に附帶して存在する。それが偶然的であるといふのはそれ自らの存在についてではなく、他の存在との關係に於て、従つてその存在の一つの仕方について語られたるものであるにすぎない。我々は偶然的なる存在を尙一つの存在として、それについて知ることができるのである。さうして共通感覚とはこの意味に於ての偶然的なるものを又は附帶的なるものを感じるところの感覚であると考へ得ないであらうか。

そこにはこの對象を感じすべき特殊なる器官を設定する必要を見ない。なぜなら偶然的なるものは常に或一つのものに附帶して感覺せられるものであり、それ自らとして分離しては知覺せられ得ないものであるからである。事實我々はまたかくの如き共通感覚に相當する器官をもつてゐない。しかもこの意味の共通的なものを知覺し得ることが事實であるとすれば、共通感覚にとつて、附帶的なものゝ意義は他の孰れにもまして此の問題を闡明するに役立つところの或ものをもつてゐることは明かであらう。

このことは更に次の如き一つの事實を明かにすることによつてより、力づよきものとなるべきである。共通感覚とは共通的なものを感じする謂ひであることは勿論であるが、共通的なものゝ概念には通常二の意味が區別せられるのである。一はそれが個々感覚とは異り、個々事物をではなく、共通的な事物を知覺するといふ意味に於てであるが、しかしそれは第二にそれ自らは共通的ではないが、多くの個々感覚によつて

少くとも視覺と觸覺との孰れによつても知覺せられるといふ意味に於て共通的であると言はれ得るのである。そしてアリストテレスにとつてはそれが共通感覺の眞の意味であつた。一つの限られたる感覺によつてではなく、他の感覺によつても知覺せられ得るものは、此等の感覺にとつて共通的でなければならぬ。そこには第一の意味に於てのやうに一の感覺とさうして他の感覺によつて、さらにはこの二の感覺の協働によつて知覺せられ得るところの或ものがあるのではなく、一つの感覺によつてか或は他の感覺によつてか、それ等の孰れかによつても知覺し得らるゝところの對象があるのである。若し共通感覺が前者の意味に於てのみ成立するものであるとすれば人は此等の多くの感覺に共通的な働きを假定しなければならぬ。それは此等の感覺に共通的ではあるがそれは又此等の諸感覺から區別せられたる一つの共通的な感覺でなければならぬ。いはゞ共通的なものはそこにそれ自らとしてとり出され、それを知覺するところの感覺も此等の諸感覺から區別せられ、そこに一つの特殊なる感覺として考へられるべきである。しかし我々は事實上かくの如き特殊なる共通感覺をどこにも見出すことができない。それがそれとして見出され得ないことは、我々がこれに對する特殊なる感覺器官を有つてゐないことによつても證明せられ得るであらう。色に對しては眼を、音については耳を、味に關しては舌を有すると同じ意味に於て共通的なものを知覺すべき特殊なる器官を我々は有つてゐない。しかも人は此等の、此意味に於ての共通的なものを知覺することも事實である。この事實とこれを支持すべき器官の缺如とがアリストテレスの共通感覺に關する定義を困難ならしめたところのアポリアであつた。しかるに今この附帶的感覚の概念をこゝに導入することによつてこの困難は或程度に於て拂拭せられ得るかのやうである。何故ならそこには個々感覺とは異つた、特殊なる一の共通器官

を假定する必要を見ない。そこに有るものは一々の感覚であり個々の器官であつて十分であり、そこに共通であるといはれるのは此等の凡ての、或は多くの諸感覚の孰れか一つによつて知覺し得られるといふ意味に於てあるにすぎないからである。それ故に特殊の共通的な感覺器官を設定することなしに、我々をして共通的なものゝ知覺を可能ならしむることに於て十分であるとはいへないまでも少くともこの問題の解釋に或種の手懸りを與へるものであるといはねばならない。我々は視覺、聽覺等の外に別に此等とは異つた共通的な感覺器官を有つてゐない。にも拘らず我々は一つの色を見るとき、同時にその擴がりをも見、この色と擴がりとから成立つてゐるところの事物の形態をも見る。人は眼によつて事物の形態を見、さうしてそれと同時にその事物の運動を知覺する。このとき我々の直接に見るものは事物の形態であつてその外の何ものであり得ない。にも拘らず一つの事物を見るとともに同時にその運動をも知覺するのは運動がこのとき事物の形態に於て附帶的に知覺せらるゝからである。人は事物の形態を見ることなしに運動を見ることはできない。その意味に於て運動は事物の形態に對して從屬的でなければならぬ。しかし運動は事物の單なる形態ではない、それはそれ自らとして一つの現象であり我々にとつてそれは事物の形態とは明かに區別せられた、又は區別せられ得べき一つの對象であるのである。それは單に形態の視覺に於て附帶的であるのみならず、また事物の觸覺に於ても附帶的であらう。我々は一つのものゝ形態を觸覺すると共にその事物の運動をも知覺するのである。此等の場合、我々の直接に見、又は觸るゝものは事物の色であり、形であることに於ては決定的であるがしかし我々は一つの事物に於て色を見、形に觸るゝと共にその運動を知覺するのである。運動せる物體に於て我々の直接に見、または觸るゝところのものは其のものゝ色であり形である

が我々は之と同時に間接的にそのものゝ運動を知覚するのである。但しこゝに直接といひ、間接といふのは——殊にそこに間接的といはるゝものは決して時間的に、または媒介的に直接であり間接であるのではない。それはたゞ我々の意識の仕方の様相を、簡単にいへば表象の *Modus* の差別を言表はしてゐるにすぎない。ブレンタノの區別したやうに一つの事物の表象の仕方については二つの様相が——即ち *Modus rectus* と *Modus obliquus* とが區別せられ得るであらう。in obliquo といふことは一つの事物に附帶的にてはあつて決して時間的に後れて、又は何等かの事物を媒介として間接的に知覚せられるといふ意味ではない。運動する事物に於て運動の知覚は色又は形の知覚と同時にである。我々は一つの事物の色又は形を見て然る後にそのものゝ運動を見るのではない。この二つの知覚は時間的に同時であつて、形は運動する形であり、運動は形態そのものゝ運動でなければならぬ。しかしそれにも拘らず一つの事物の知覚に於てこの二つの様相は明かに區別し得らるべきである。運動する事物は何等かの形を有ち色をもつてゐる。運動する事物に於て我々の直接に見るものはその形であり色であつて運動ではない。運動はたゞ附帶的にさうして同時に知覚せられるところのあるものでなければならぬ。さうして運動は色の視覚に於て附帶的であるのみでなく、形の感覺に於ても附帶的でなければならぬ。この意味に於て運動は即ち一つの共通なるものであり運動の知覚は共通感覺であり得るのである。一般に附帶的なるものは白き着物に於てのディアロスの息子の如きものであるが色の視覚に於ける附帶的運動は又形の感覺に於ての附帶的運動でもあることによつて共通なるものとなるのである、のみならずこの意味の共通なるものが眞の意味に於ての *re nominis* でなければならぬ。なぜならそこには個々感覺に固有なるものゝ外に何等の別種なる感覺を假定することなしに尙共通的な

ものを、さうして共通的なるものゝ知覺を最も優越せる意味に於て説くことができるからである。個々感覺の外に別種の知覺作用を考へることはいふまでもなく誤である。我々は個々感覺とそれに相應する個々器官との外に共通的なるものを知覺すべき如何なる器官をも有つてゐない。しかもそれと同時に此等の共通的なるものゝ知覺を我々がもつてゐるといふことも事實である。故にこの問題を此等の事情からして滞りなく確定し得る唯一の途は個々感覺を個々感覺としながらそれと同時にいはゞその上に共通的なるものを説かうとすることではなければならぬ。さうしてこの途は附帶的な感覺を土臺とするところの共通感覺を、またはこれを土臺とすることによつて多くの個々感覺に共通的なるものを考へるより外にはないであらう。共通感覺とはたゞ多くの個々感覺に、少くとも視覺と觸覺とに共通的なるものを意味するに外ならない。しかしかくの如く多くの感覺に共通的でありまた有り得ることは個々感覺に附帶的な感覺を、さうして一つの事物の知覺に於て *Obliquus* なる様相に於て知覺し得らるゝところの或ものを假定することなしには不可能であるといはねばならぬ。何故ならこれを假定することなしに一つのものが多くの感覺に共通であることは如何にして説明し得らるるであらうか。

運動が視覺によつても視られ、觸覺によつても知られ得るといふことは單に運動が或時は視覺に、他の時には感覺に關係し得るといふことではない。運動は我々が運動する事物に於てその色を見、又はその形に觸るゝときそれに附帶して知覺し得らるゝところのものである。運動といふ一つの共通的對象があつてそれが視覺によつて又は感覺によつて知らるゝのではなく、運動する事物に於て我々が視、又は觸るゝと共にそのものゝ運動が知覺せらるゝのである。一つの色は或物の色として見られ、一つの形は或事物の形として觸

れらるゝと同じやうに運動する事物に於ては、色又は形は運動するものゝ色として又は形としてのみ知覚し得らるゝのである。運動はこの意味に於て色又は形の附帶的現象であるといはねばならない。運動は色の視覚に附帶して知られ、形の觸覺に關聯して知らるゝが故にそれが視覺と觸覺とに共通であるといはるゝのである。それと同様に我々が赤を見ると同時にそれが青に非ることを知り、青を視ると共にそれが赤に非る所以のものを見るが故に赤と青との互に同じからざることを知り得るのである。赤と青との差異はそれ故に赤と青との視覺に於て附帶的に知覺し得らるゝところの共通的なものでなければならぬ。我々は赤を或るものゝ赤として見ると同じやうに赤を赤ならざるものから區別して見る。この區別は單なる判斷作用ではなく赤と青との視覺に於て又はそれと共に知覺し得らるゝところのものであるのである。

しかし此等の問題を決定的ならしむるために最後に一つの問ひを重ねよう。共通的感覺は個々感覺にとつて附帶的に存在するものであるがしかし一つの事物が多く感覺に如何にして共通的であり得るであうか。赤と青との差異性は赤の視覺と青のそれとに依屬することは勿論であるがそれは赤又は青と同一でないことも明かである。共通感覺は個々感覺の各々或は此等の集合以上の何ものかを有つてゐる。それは個々感覺以上のあるものであることによつてまさに共通的であり得るのであるがしかしこのことは如何にして可能であるであらうか。感覺はそれに固有なるものに止り共通的なものに與ふことができる。赤が單に赤として見らるゝ限りそれが青とは異なる所以のものを見ることができぬ。我々はそこに赤が青と同じからざる所以のものを赤と青との二つに於て意識しなければならぬであらう。さうしてこのことは個々感覺がそれに固有なるものゝ外に出づることによつてのみ可能であるのである。我々の感覺は或ものを感覺すると共にさらに

その感覺を感覺する。我々は一つの赤を知覺すると共にこの知覺を再び知覺する。赤が青と異なることはこの知覺の知覺によつてのみ可能であるといはねばならない。

意識は感覺をさらに感覺することを以てその本質とする。知覺をさらに知覺することは意識そのものの性質に屬することなのである。ブレンタノが意識の本質として數へたものの一つはこのことであつた。共通的なるものの成立には意識のこの性質がその根柢をなしてゐるといはねばならない。我々はアリストテレスの共通感覺に關する第二の意義をかくの如く解釋することによつて恐らくは彼の意を得るに近きものがあるであらう。さうして共通感覺についての三の意義は上の如く考へらるゝことによつて略々それの位置を得たもののやうである。我々は此等の意義を明かにすることとゞめて、更に共通感覺の種々相としてアリストテレスによつて數へられた多くの現象に、例へば想像、記憶、追憶、睡眠、夢等についての問題には立入らぬであらう。たゞ此等の中に於て想像作用については特殊の關心を有つてゐるがそれもフロイデンタールの精細なる研究に(註二)譲つてこゝには觸れぬであらう。

(註一) Freudenthal: Über den Begriff des Wortes Phantasia bei Aristoteles 1863